

第2章 精神的データ・システム

第1節 研究の概要

昭和53年度研究（「大学体育研究」第1号）では、

- ① トータル・マネジメント・システムにおけるMIS（Management Information System）及びMISの一機能としての精神的データ・システムの位置づけ
- ② 精神的データ・システム開発のための基礎資料の収集
- ③ 精神的データ・システムの第1次フローの提示

を目的として作業をすすめ、

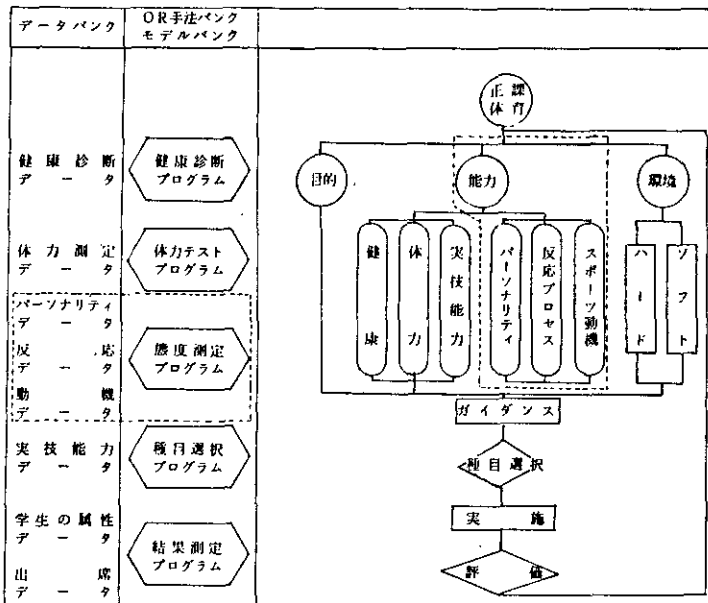
- ① 目的①については図9に示す位置づけとし、
- ② 基礎資料については、第1号第1章から第3章に示す結果を得、
- ③ 第1次フローは図9の如き結果を得た。

これをうけて昭和54年度は、

- ① トータル・フローが円滑に流れるようにするためのMISの整備の一環として、精神的データ・システムをさらに精密なものにする。
- ② ①の目的を達成するため、昭和53年度及び昭和54年度の資料から学生の自己概念を、筑波大学における平均的學生像として浮き彫りにし、これを対象とする正課体育の学習—指導場面に
おける有益な情報は何か、その内容及び流れを考察する。
- ③ ①、②の結果から本システムの再構築を図る（第2次フロー、第3次フローの提示）

以上を目的として考察をすすめた。

図9 正課体育の基本フローとMIS



※ 点線内が精神的データ・システムとして位置づけられる。

第2節 精神的データからみた筑波大学生像

本節では、学生が正課体育に臨む態度や体育・スポーツとの対峙における自己概念を考察する。ここで用いた調査は「正課体育に関する調査」(注1)ならびに「スポーツに関する調査」(注2)である。前者の結果の詳細は「大学体育研究」第1号、とくに第1章から第3章を参照されたい。

§1 「正課体育に関する調査」からとらえた筑波大学の平均的学生像

「正課体育に関する調査」では、学生の生活意識、余暇活動やスポーツ活動への態度、健康・体力についての自己認識、過去から現在に至るまでのスポーツ的環境の認識が問われている。これらのデータは、学生が上述の事柄をどのように認識しているのかを示すものであり、したがって、そこに見いだされた傾向は、学生の自己についての認識および自己をめぐる事柄について認識を代表するものと考えられる。

そこで、「正課体育に関する調査」で得られたデータの一般的傾向をまとめ、これを「筑波大学の平均的学生像」と名づけ、学生の潜在的ニーズや体育・スポーツに対する態度をみとめることにする。なお、精神的データ・システム構築に関連する考察は第3節で述べることにする。

さて、「正課体育に関する調査」におけるデータの一般的傾向をみるならば次のようにまとめることができる。

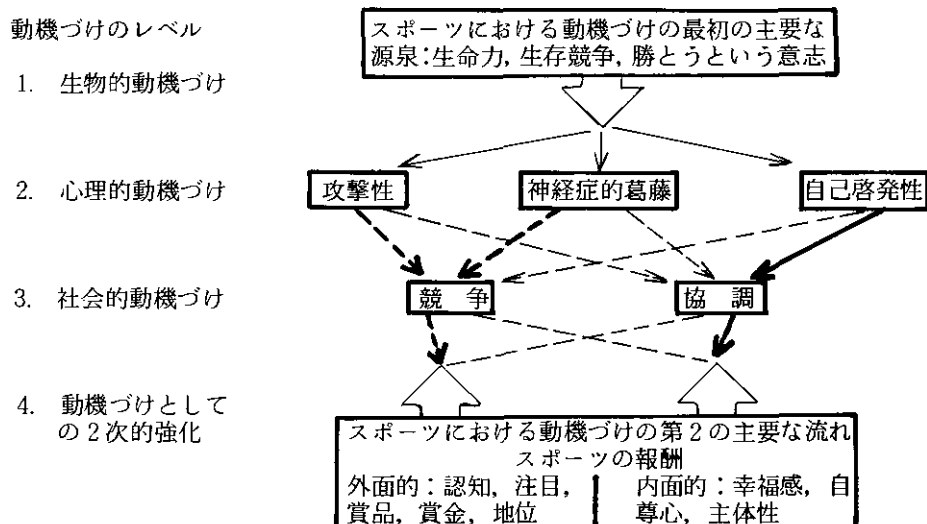
- ① 現在の生活に対して「生きがい感」「充実感」を感じているものは約半数おり、残りの約半数は何らかの欠如感をうたえている(注3)。本学学生の場合、「どちらとも言えない」という回答は1割程度と少なく(注4)、ここで自己の目標とその達成度に関してより明確に判断を下す態度がうかがえる。
- ② では、学生の生きがい感、充実感を支えているものは何かをみると(注5)、生活上の「変化を求める心」と「内面的報酬」の2つが影響をもつものとして挙げられる。ここで、具体的にどのような「変化」や「内面的報酬」が求められているのかは、「専門以外の教養も深めたい」「ゆっくり休養したい」という欲求が高いこと(注6)、また生きがい充実度に対して「自己表現」「人間関係」の影響が強いこと(注7)などから推測することができる。すなわち、日常生活から離れた休養と専門以外の教養を身につける場をもうけ、その中でよりよい人間関係と自己表現の機会を得たいと願っていると考えられる。
- ③ さらに、学生がそのような場においてどのような活動を行なっているかをみると、本学学生の場合、体育の授業に対しては積極的である(注8)としながらも、余暇においてスポーツを選好する割合は全国一般の学生に比べるとより低い(注9)。しかし、スポーツによって「日常からの解放」「気分転換」「ストレスの解消」や、「運動不足の解消」「健康増進」などが満たされるとしており(注10)、スポーツ活動の効用について、生きがい感を満足させようものと考えていると思われる。余暇によく行なわれるスポーツ種目としてはキャンプ、夏登山、ジョギング、スキー、テニス等が挙げられている(注11)。
- ④ また、ほとんどのものが健康か体力に自信ありと答えている(注12)にもかかわらず、年令とともにそれらの実測値は低下している(注13)ことは注目すべきである。

§ 2 「スポーツに関する調査」にあらわれた筑波大学生像

本項では、ブリティッシュ・コロンビア大学のD. S. バット (D. S. Butt) が作成した「スポーツに関する調査」(Sports Protocol Form-B)を本学およびいくつかの他大学の学生を対象に行なった結果から、学生の性格像をさぐる。

ここで用いた調査のうちスポーツ・スケール (Sports Scale) は図10に示した5つの因子で構成されている。彼女によれば、図中太い破線で示した連がりのプロフィールを有するものは、スポーツ場面でさまざまな問題を起こしたり、スポーツを途中で放棄したりする可能性をもっており、一方、太い実線の連がりて示されるプロフィールをもつものはそのスポーツ集団を建設的に発展させる可能性をもっている(注15)。

図10 スポーツにおける動機要因



スポーツにおける動機づけは二つの主要な源泉——生物的動機づけとスポーツ体制を通じて得られる強化——から来ている。心理的動機づけは、攻撃性、神経症的葛藤および能力という3つの基本的エネルギー・モデルに表わされている。実線と点線はその後の結びつきの強弱を表わす。攻撃性と神経症的葛藤は、競争という社会的動機づけに至る可能性がきわめて強い。協調に至る可能性は薄い。競争志向型の者も協調志向型の者もスポーツの強化によって影響を受ける。外面的報酬は競争志向型にとって、内面的報酬は協調型にとって、きわめて重要である。

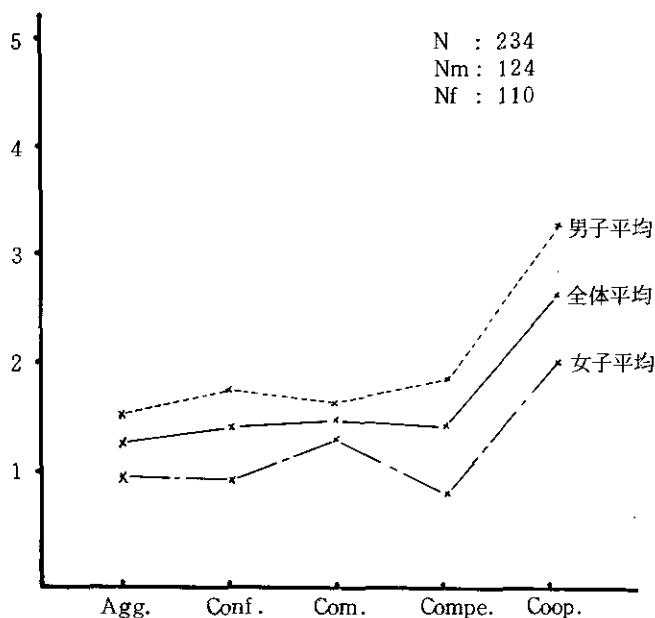
この調査を我が国の学生に行なった結果は表7に示した通りであり、図11は平均得点によるプロフィールである。

表7 D. S. Butt's Sports Scale への回答の \bar{X} , SD

(内: SD

因子 \ 区分 人数	全 体 234	男 子 124	女 子 110
攻 撃 性	1.15 (1.15)	1.41 (1.17)	0.86 (1.06)
葛 藤	1.29 (1.68)	1.63 (1.47)	0.90 (0.93)
自己啓発性	1.42 (1.59)	1.53 (1.30)	1.29 (1.20)
競 争 性	1.28 (2.00)	1.69 (1.26)	0.83 (1.44)
協 調 性	2.64 (1.66)	3.20 (1.56)	2.00 (1.53)

図11



全体に、各因子の得点が低く、標準偏差も比較的大きいが、これは本来この調査が臨床場面で用いられるものであり、回答の個人差が大きくなるように作成されているので、それが相殺されたことによるものと思われる。

しかしながら、男女間、集団間、因子間の平均値の差を検定した結果、表8及び表10に示す結果を得た。

表8 男女間及び一般学生と運動部間の平均の差の検定

(t 値)

因子 \ 比較	男 子 — 女 子	一般学生 — 運動部A	一般学生 — 運動部B
攻 撃 性	3.729 ^{**}	- 3.963 ^{**}	- 1.614
葛 藤	4.449 ^{**}	- 3.403 ^{**}	- 6.758 ^{**}
自己啓発性	1.453	- 1.329	0.284
競 争 性	4.845 ^{**}	- 6.170 ^{**}	- 2.638 [*]
協 調 性	5.893 ^{**}	- 2.017 [*]	- 2.080 [*]

注) * : $P < .05$, ** : $P < .01$

表9 因子間の平均の差の検定

(t 値)

属性 \ 比較	攻撃性 — 自己啓発性	葛 藤 — 自己啓発性	競争性 — 協 調 性
男 子	- 0.761	0.565	- 8.351 ^{**}
女 子	2.804 ^{**}	2.682 ^{**}	- 5.814 ^{**}
一 般 学 生	- 1.230	- 1.873	- 5.746 ^{**}
運 動 部 A	1.592	0.529	- 1.794
運 動 部 B	0.929	4.523 ^{**}	- 2.696 [*]

注) * : $P < .05$, ** : $P < .01$

この結果から次のことが言える。

- ① 男子は女子に比べ、自己啓発性を除いて高い得点を示している（いずれも危険率1%）。
- ② 女子は一般に得点が低い、攻撃性、葛藤に比べて自己啓発性が高く（1%水準）、また競争性に比べて協調性が高い（1%水準）。このプロフィールはバットの仮説からみれば望ましいかたちである。
- ③ 男女いずれにおいても、協調性は競争性に比べて高い得点を示す（いずれも1%水準）。

このような結果から、もし我々がバットの仮説を支持するなら、彼女のいう自己啓発性を高めるような動機づけ、指導内容を準備しなければならない。

表10及び図12はスポーツ・スケールによって本学の一般学生と運動部とを比較したものである。運動部A、Bはいずれも、関東ブロック、全日本学生選手権大会などでつねに上位を占める競争志向の強い部である。

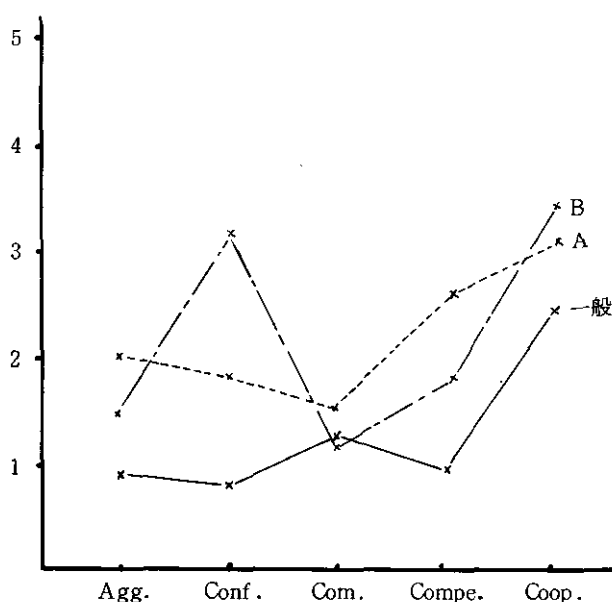
これらの平均値の差を検定した結果は前掲の表8、9に示す通りである。

この結果からは次のことが言える。

表 10

因子 \ 区分 人数	一般学生 50	運動部 A 30	運動部 B 13
攻 撃 性	0.88 (1.28)	1.97 (0.98)	1.54 (1.34)
葛 藤	0.76 (1.09)	1.70 (1.32)	3.15 (1.17)
自己啓発性	1.18 (1.13)	1.53 (1.12)	1.08 (1.07)
競 争 性	0.92 (1.14)	2.57 (1.15)	1.85 (1.03)
協 調 性	2.46 (1.49)	3.10 (1.10)	3.39 (1.69)

図 12



- ① 一般学生は、前述したと同じ理由で低い得点を示している。
- ② 一方、運動部群はいずれも、それぞれに固有の傾向を示しながら、一般学生よりも高い得点を示している(5%～1%水準)。ただし、一般学生と運動部B間の攻撃性、一般学生と運動部A及びB間の自己啓発性には統計的有意差はみられなかった。
- ③ 一般学生は、全体に得点は低いもののバットのいう望ましいプロフィールを形成している(ただし、競争性－協調性間では1%水準で有意差がみられたが、攻撃性－自己啓発性間および葛藤－自己啓発性間には統計的有意差は見いだせなかった)。
- ④ 運動部群はいずれも、協調性で高い得点を示しながらも(ただし、運動部Bでは5%水準で

有意差がみられたが、運動部Aには有意差はみられなかった)、同時にバットのいう望ましくない性格像を有している(ただし、統計的有意差は運動部Bの葛藤—自己啓発性間に1%水準でみられただけである)。

このようなことから、一般学生には、上述したように、自己啓発性を高めるような指導が必要であり、一方、各運動部では性格像の難点となっている部分を解決しつつ自己啓発性を高めるよう指導し、高い協調性と結びつける努力をなすべきである。

さらに、普通一般のものは潜在的に、ここでいう望ましい性格像を有しているが、競争志向の強い運動部集団に入ったことでこれがゆがめられたのではないかとの推測も不可能ではない。バットはこの点について、このような性格上のゆがみが生ずる責任は、その本人よりもむしろ彼らの両親、教師、コーチ、そしてマスコミ関係者にある(注16)としている。この仮説を支持するならば、我々は、授業場面をどのように形成するかについて再検討をせまられる訳である(授業場面での問題については、本編第2部において、別のアプローチにより論考するので参照されたい)。

第3節 精神的データ・システムの再構築

本節では第2節で得られた本学の学生像をもとに、これらを対象とする正課体育のガイダンスをめぐるシステム、即ちそこで用いるデータとその流れを考察する。

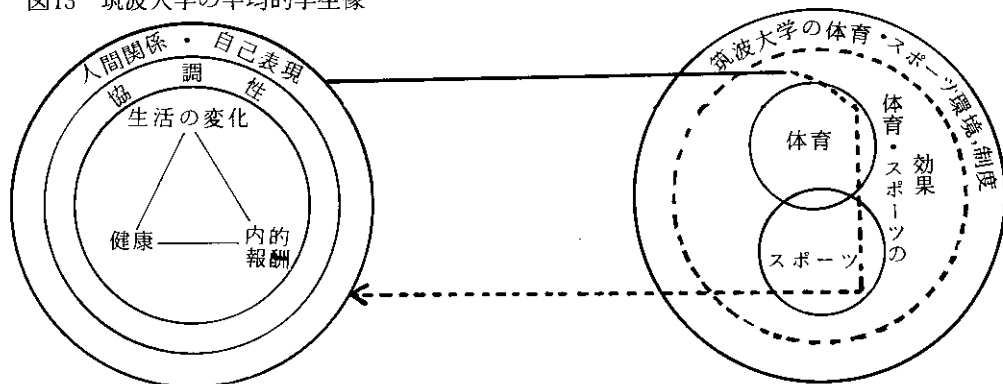
§1 旧システムから新システムへ

(1) 学生像からの考察

I) 筑波大学の平均的学生像からの考察

図13は第2節で考察した筑波大学の平均的学生像を図式化したものである。本学学生は、一般に図中左の同心円で示した心理的内部構造を有し、体育・スポーツに対してある程度の理解を示しながらも、積極的に体育・スポーツに参加しているとは言い難い。この点については第3章の中でも別の角度から、積極的にでない理由の分析とともに述べられるであろう(第1部第3章§2=スポーツ時間)。

図13 筑波大学の平均的学生像



そこで、潜在的には体育・スポーツに向かっているにもかかわらず、行動に転化しない彼らを動機づけるのに有効な情報は何か、について考察してみよう。

先ず、学生は自分の健康については関心を抱いている。そして彼らは健康や体力にある程度の自信をもっているとしている。しかし、実際の測定値は年々低下の傾向にある。このような情報は、とくに健康・体力に関心をもたないものに対しては知らせるべき情報であると考えられる。また、彼らは健康・体力の保持増進にとって、体育・スポーツが有効であることを認めている。ここで彼らが、効果を知っていながら行動に移さない理由については様々の推測が可能であるが、このとき必要な情報としては、何を（種目）、どの位の期間、どの程度行なって、どのような結果になったか、それは自分の場合、どのように当てはまるのか、という項目にまとめることができるであろう。しかし、ここで考えなければならないのは、彼らのその他の心理的内部構造との関係である。したがって、上述の項目に、誰とともに、どこで、（人間関係、自己主張、内面的報酬などに関連して）どのようなことが行なわれるのか、そしてその結果は如何、ということを加えなければならない。

これらの項目の中で、精神的データ・システムに関連すると思われるものは、人間関係等に関連してどのようなことを行ない、どのような効果を得たかについてである。その他の項目については、身体的データ・システム及び環境的データ・システム、ならびに個々の授業場面に関することなので、各担当章に論をゆずることにしてしよう。

さて、上述した事柄をシステム内にどのように位置づけて機能させるかについて考察してみよう。

上述のような事柄については古くから多くの学者や様々なスポーツ体験者の語るところであるので、所謂名著のリストを提示することも有効な動機づけとなろう。しかし、本学の体育4年間履修という特異な制度に着目するならば、その制度を体験したものの体験談などがより有効な動機づけとなろう。したがって、この情報をいつ、どのようにして学生に与えるかが問題となるが、この点については、年度当初に学生に与えるガイダンス・マニュアルが適切であろう。

さて、上述した事柄のほかに、精神的データ・システムとしては、学生の精神衛生についても考えなければならないであろう。というのは、これまで述べてきたように、学生は潜在的に体育・スポーツに対して積極的な動因をもっているにもかかわらず行動として表現されにくい傾向をもっている。これを単なる表相的誘因にのみ問題があるとするのは危険だと思えるからである。つまり、体育・スポーツ場面、それらをめぐる様々な場面は学生の心理的内部構造をよりよい方向に改善するものであったかどうか、また、改善の方向を示唆する機会がもうけられていたかどうか問題なのである。具体的に言えば、学生が彼の心理的内部構造の中のどこかに問題をもっているとき、それを解決する門戸が開かれていなければならない、ということである。一般生活上の問題については、本学では、保健管理センターの学生相談室をはじめ、上述の趣旨を遂行する門戸はいくつか開かれているが、それぞれが有機的に連関をもって機能しているとは、必ずしも言えない。しかも、従来、体育・スポーツに関連する問題については、授業の担当者、部のコーチなどにまかされ、それぞれ全く独立していると言ってよい。そこで、体育・スポーツに関する相談のできる場面を、他の部門との連関も考えながら、つくりあげる必要があると思われる。

Ⅱ) 「スポーツに関する調査」による学生像からの考察

ここでは「スポーツに関する調査」で得られた学生像とD.S.バットの仮説から、精神的データ・システムの在り方について考察する。

第2節の結果、「スポーツに関する調査」からは、次の4点が明らかにされた。

- ① 一般学生においては競争性より協調性が高い。
- ② 一般の男子学生は女子学生より、すべての因子について得点が高い（ただし、自己啓発性については有意差はない）。
- ③ 一般の女子学生はバットのいう望ましいプロフィールを有しているといえる。男子に女子ほど顕著ではないが、望ましい傾向がみられる。
- ④ 運動部はいずれも協調性は高いが、バットのいう望ましいプロフィールには当てはまらない。むしろ運動部によっては、若干危険性のあるプロフィールを示している。

これらのデータは、学生個々人にフィードバックするというよりは、むしろデータ・バンクに貯蔵して、教官が指導上必要なときにいつでも取り出せるようにしておくべきものと考え。つまり、教官にとって、授業のガイダンスを行なうときの支援情報、あるいはカウンセリング情報となるものである。

カウンセリング情報としては、図14、15に示した個々の学生のプロフィールを手がかりに、次のように利用される。

図14、および図15に示した事例はそれぞれ、バットのいう危険性を有したものと望ましいかたちをもったもののプロフィールである。

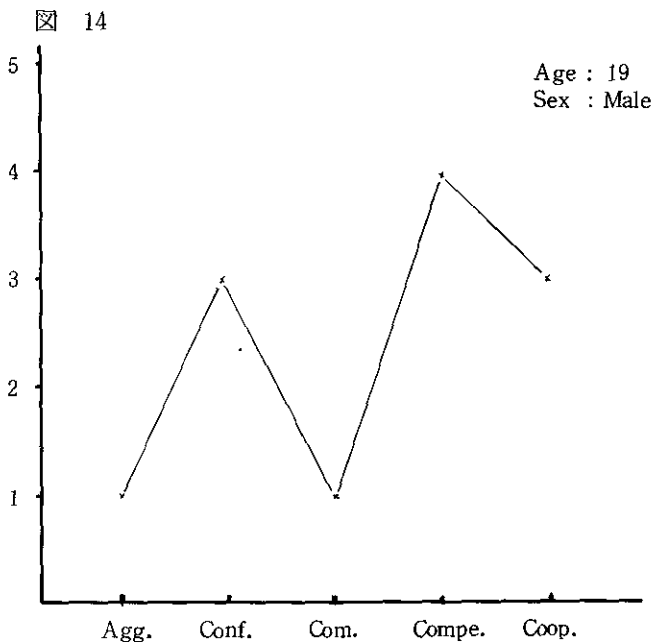


図 15

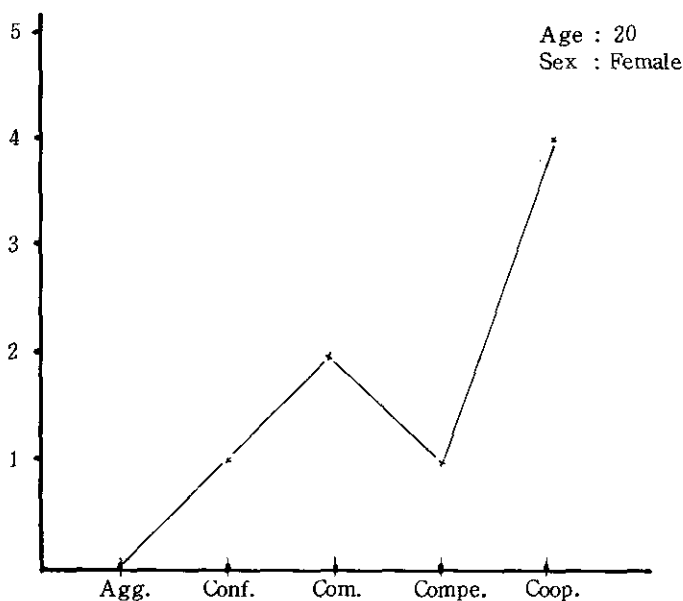


図14の被検者の場合、協調性が低いものではないので、この被検者特有の葛藤を解決することで望ましい適応が、むしろ積極的なかたちで（競争性の高さから）可能になるものと思われる。

また、本学正課体育にとっては、「正課体育のねらい」から具体的な目標を設定するときの示唆となる。すなわち、潜在的な協調性の高さ（上述の事例の場合も、危険性をもつ学生においても3点と比較的高い協調性が認められる）を顕在化させ、自己を啓発する授業の展開、という教官サイドの目標設定が可能となる。

(2) 本学正課体育のねらいからの考察

上述した調査結果からの考察とは別に、本学の理念から設定した「正課体育のねらい」をもとにした精神的データ・システムのあり方の考察も必要と思われる。

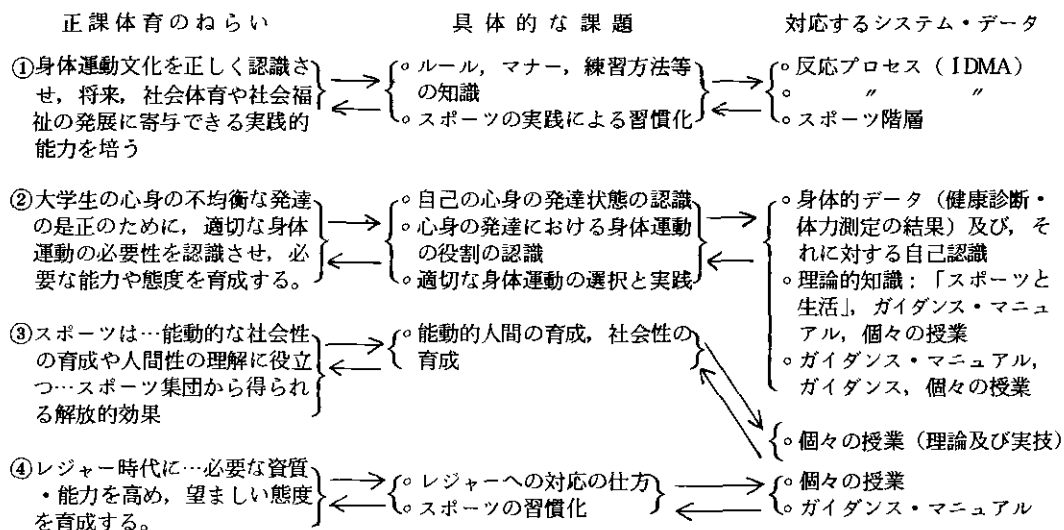
そこで、正課体育のねらいから具体的な課題を挙げ、それらに対応するデータは何かを考察し、図式化したのが図16である。

「正課体育のねらい」としては図中左端に示した4つが挙げられている（注17）。それぞれに対応する具体的な課題は1～3項ずつ考えられ、さらにこれらの課題達成を支援するデータやシステムとしては図中左端に掲げたものが考えられる。

「ねらい」から具体的な課題を導き、これに対応するデータ・システムを補足して授業に向かえば、課題の達成、ひいては「ねらい」の達成がより容易になる、という図式である。

ただし、ここでは多少、事項の重複があったり、他のシステムとの関連の在り方がそれほど明確ではない。全体的なシステムとの有機的な連関については今後の課題としたい。

図16 正課体育のねらいと対応する課題及びシステム・データ



※ 「スポーツと生活」：身体運動文化の意義や効果について、「実技」と関連させて認識させたり、人間や社会と身体運動文化との関わりについて論考する理論の授業であり、総合科目（一般教養）の中で開講されている。

(3) 新・旧システムの比較

これまでの考察から、精神的データ・システムの流れを考察する。図17, 18, 19はここでの考察結果を以前のものと対比させて示したものである。

図17 第3次フロー

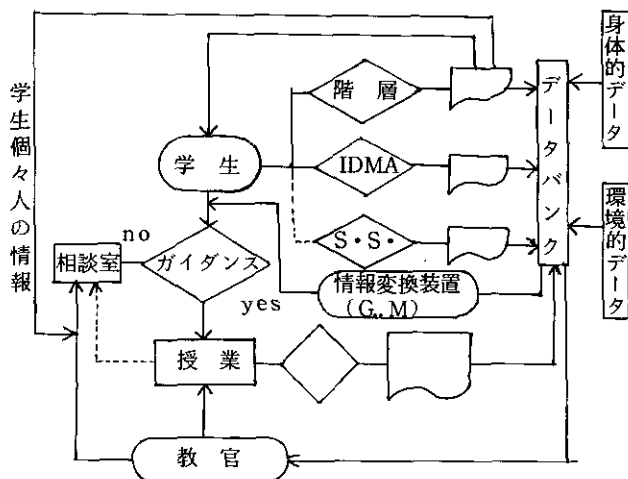


図18 第1次フロー

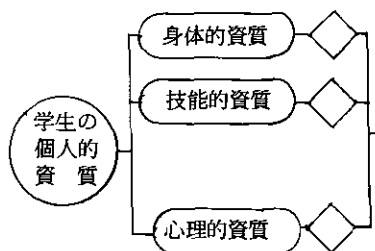


図19 第2次フロー

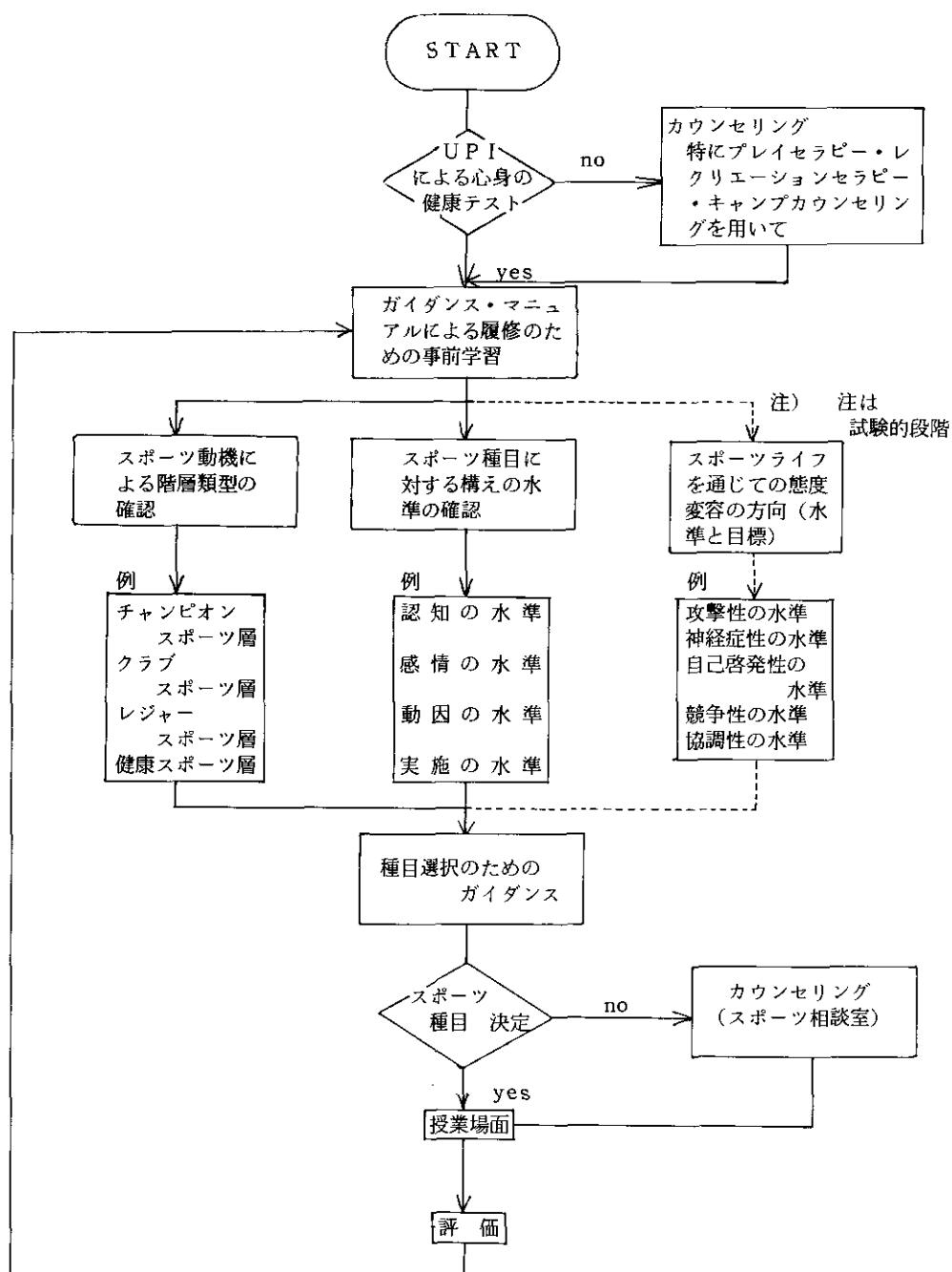


図18の第1次フローは「大学体育研究」第1号に掲載したものであり(注18)、心理テストの中味が定まっていない。図19の第2次フローは昭和54年度日本体育学会に発表したもので、心理テストの内容がいくつかはめこまれている。図17の第3次フローでは、第2次フローを整理して、学生に流れる情報と、一旦データ・バンクに入ったのち、かたちを変えて学生にフィードバックする情報、教官に流れる情報等に分けた。これらの情報のうち、どのデータがどのように変換されてどこに流れるかについては§ 2、§ 3で述べる。

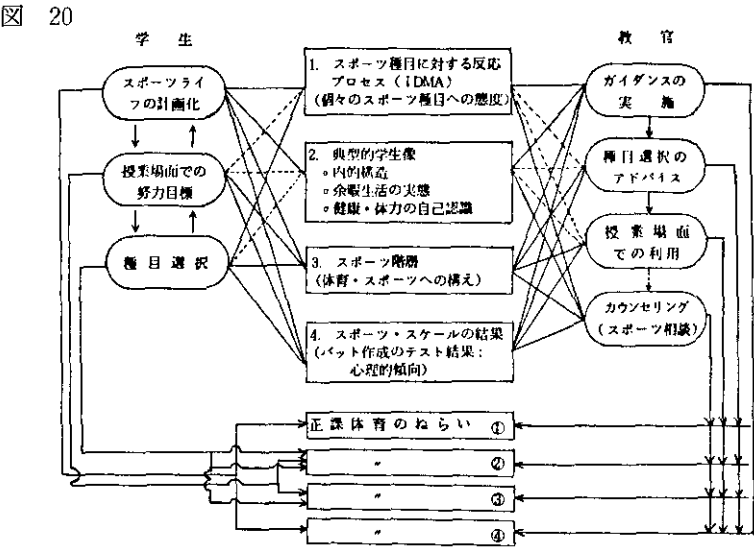
§ 2 学生への支援情報の内容と流れ

学生は、授業を履修する前の段階で、精神的側面については3つの検査を受ける。これらの結果は統計的に処理されて一旦、データ・バンクに貯蔵され、まとめられたものは教官にフィードバックされる。このうち、スポーツ階層(注19)については個々人のデータをそれぞれの学生にフィードバックさせ、自分がどのような階層に属するかを認識させる。学生はこのデータをもってガイダンスに参加するが、このとき、データ・バンクから全体的な傾向に関するデータが、一旦、情報変換装置を通して学生に流れる。このときの情報変換装置は、本システムではガイダンス・マニュアルに当たり、身体的データや環境的データもここで変換されて学生に与えられる。

ガイダンスに参加した学生に何らかの問題が生じたときは相談室に行き、教官と相談を行なう。一方、教官は、データ・バンクからの全体的傾向と学生の個人的データを参考にしながら相談を行ない、合意が成立したらそれぞれ授業に向かう。ところで、相談は授業が展開されている途中でも開かれていて、必要な情報はデータ・バンクから取り出せる。

また、授業の成果はまとめられてデータ・バンクに貯蔵され、翌年のガイダンス、授業に役立てられる。

具体的にどのデータがどの情報に変換されるかを、教官サイドと比較しながら図式化したのが図20である。ここでは実線で結ばれたところがより強い関係をもつ。



(1) スポーツライフの計画化情報

学生が自己及び社会の将来を先取りして生涯の学習計画の中にスポーツを位置づけるとき、個々のスポーツ種目に対する態度（知覚、知識、興味、欲求、活動）の一般的傾向、ならびに自身の態度を知ることには必要であろうし、同時に、自身はスポーツ活動に対してどのように構えているか（無関心か、観戦するだけか、すすんで実践する方か、等）も知る必要がある。さらに、実践をすすめてゆくうえでどのような理想をもつべきかについても、これらの情報が有効である。

(2) 種目選択のためのガイダンス情報

計画を実行に移す機会としてもうけられる正課体育で何を選択するかを考えると、自身のスポーツ活動への構え、個々の種目への態度を知ることが重要であるし、ある集団内に位置したときの自分を先取りしておくことは必要であろう。

§ 3 教官への支援情報の内容と流れ

(1) ガイダンス実施のための情報

教官が図16で示したような「ねらい」をもつ正課体育のガイダンスを行なうためには、その対象者である学生の実態として、彼らの生活意識構造、その中での余暇活動～体育・スポーツ活動の位置づけの如何、そして体育・スポーツ活動に対する構えや態度を知ることが必要であろう。また、ひとつの集団を形成したときの学生個々人の行動を予測するための一般的な心理的傾向、個々人の心理的傾向を知ることが、実際の授業との関連からも重要な事柄と思われる。

(2) 種目選択のアドバイス情報

学生の種目選択へのアドバイスは、以下に述べる授業場面（臨床心理的な解説は第2部を参照のこと）やカウンセリング（スポーツ相談）とも関連して、単に授業を実施するというだけでなく、学生が体育・スポーツに参加するという文脈で重要な事柄である。ここでは学生の体育・スポーツに対する態度や構え、心理的傾向の全体像ならびにこれらについての個々人のプロフィールが有効な情報となるであろう。

(3) 授業場面での利用

(2)で述べたような意味で、体育・スポーツに対する学生の態度、構え、心理的傾向に関する全体的そして個々のデータは、ひとつの集団を形成するという意味をもつ授業の展開における有効な情報となる。

(4) カウンセリング情報

上述の文脈で、学生が体育・スポーツに参加しようとし、あるいは参加しているときに何らかの問題が起こった場合（例えば、参加を躊躇したり、集団からの逸脱行動等）、それらを事前に予測したり、事後の処理を行なうカウンセリング（スポーツ相談）が行なわれる。ここでは体育・スポー

ツに対する学生個々人の構え、心理的傾向が利用される。

図20に示すように、教官は「ねらい」の達成に向けてデータを受けて授業に向かい、一方、学生は変換された情報を受けながら授業に参加し、「ねらい」に近づいてゆく。

第4節 まとめと今後の課題

本章では53年度研究の成果をうけて次の事柄を目的として考察をすすめた。

- ① トータル・フローが円滑に流れるようにするためのM I Sの整備の一環として、精神的データ・システムをさらに精密なものにする。
- ② ①の目的を達成するため、53年度及び54年度の資料から学生の自己概念を、筑波大学における平均的学生像として浮き彫りにし、これを対象とする正課体育の学習―指導場面における有益な情報は何か、その内容及び流れを考察する。
- ③ ①、②の結果から本システムの再構築を図る。

考察の結果、②の目的に対応する筑波大学における平均的学生像として図13のような図式を構成した。ここでみられる平均的学生の心理的特徴は、健康、内面的充実、生活上の変化への関心と欲求が強く、他人との協調性を重視している。そしてこれらの事柄によって満足されるよりよい人間関係、自己表現の機会を求めている。しかしながら、これらのことが体育・スポーツ場面で満たされることを認めながらも、自ら積極的に体育・スポーツ活動に参加しているとは言えない、ということである。ここでこのような心理的特徴を有する学生らには、主として「誰とともに」、「どこで」、「どのようなこと」を行ない、「どのような結果」を得たかを人間関係や自己表現、内面的報酬と関連させた情報が有効であると考えられる。

また、本学正課体育のねらいと学生に与える情報との関連性を考察し、それぞれ、図16、図20に示す図式を構成した。

さらに、これらの関連性から精神的データシステムの再構築を図り、第3次フローとして図17を構成した。第1次、第2次フローではデータ～情報の通路を一つの流れとしてとらえていたが、第3次フローでは学生に流れるもの、教官に流れるものとに分けた。そして、すべてのデータが一旦、データ・バンクに入り、処理されたのちにそれぞれにフィードバックされる。このとき、学生への情報は、さらに変換装置を通る。この変換装置は、ここでは「ガイダンス・マニュアル」にあたる。

もう一つの特徴は、第1次フローにはなかった「相談室」を第2次フローから導入したことである。そして、第3次フローでは、「相談室」は常に開かれて機能し、ここにはすべてのデータ、情報が送られてくるようにした。

上述した如く昭和54年度研究の結果、正課体育の対象者である学生の心理的内部構造、生活上のニーズや体育・スポーツへのニーズが浮き彫りにされ、これに対する教官サイドからのガイダンス手順における精神的データの流れがより精密なかたちにとめられた。

しかしながら、今後このようなシステムをより有効に生かすためには次の諸点の検討が必要であり、今後の課題となる。

- ① 正課体育の目的をさらに吟味して正課体育のあり方を検討する。
- ② ①の内容の1つとして、D. S. バットの仮説を吟味し、どのように生かすかが検討されなければならない。とくに、彼女の仮説は所謂トップ・アスリートを対象に論じたものであり、正課体育でどのように展開しうかを検討しなければならない。
- ③ 前述した項目もさることながら、これら精神データやそれを変換した情報は、単に学生や教官に流せばそれで済むものではなかろう。これらの事柄を取捨選択して如何に授業の中で生かすかが大きな問題であろう。さらに、いうまでもなく授業はこれらの情報からのみ成り立っている訳ではないので、授業展開における情報システムの位置づけが吟味されなければならない。
- ④ また、システムを実際に稼働させるに際してデータ採取の時期をどうするかが、重要な問題となる。

(注1) 「正課体育に関する調査」：1977年9月、筑波大学生を対象とした悉皆調査。調査方法、調査内容についてはそれぞれ、「大学体育研究」第1号序章 pp. 1～3, 同、付属資料 pp. (1)～(6)を参照されたい。

(注2) 「スポーツに関する調査」：1978年ブリティッシュ・コロンビア大学のD. S. バットが作成したもので原題は“Sport Protocol Form-B”。「スポーツに関する調査」はこれを翻訳したものである。調査内容は彼女作成によるSport scale および Background Information, CPI から抜き出した Affect Scale, Activity scale, Socialization Scale, そして Murray の社会的動機づけのうちの6因子から構成されている。本来、これらの調査内容に対する回答を個人ごとに観察して臨床場面でのカウンセリングに補助資料として用いる。本研究においては、構成された内容のすべてにわたって調査したが、ここでの分析には、Sport Scale のみを用いた。

(注3) 「大学体育研究」第1号, pp. 14～16

(注4) 同, pp. 14～15

(注5) 同, pp. 18～23

(注6) 同, pp. 41～48

(注7) 同, pp. 18～23

(注8) 同, pp. 75～76

(注9) 同, pp. 29～32

(注10) 同, pp. 32～34

(注11) 同, pp. 29～32, pp. 37～40

(注12) 同, pp. 59～64

(注13) 同, pp. 64～72

(注14) 協力を受けたのは専修大学、桐朋学園短期大学であり、いずれも昭和54年2月に調査を行なった。

(注15) D. S. バット著、浅田・松田訳：「文明としてのスポーツ―ヒーローの心理学―」、日本経済新聞社、1978、とくに1～3章および6～7章を参照されたい。

(注16) 同, pp. 193 - 294

(注17) 大学体育教本, pp. 10 - 11

(注18) 昭和53年度日本体育学会でも発表された。

(注19) 「大学体育研究」第1号 p. 20 「スポーツ動機」を参照。また, 日本体育協会編「日本人のスポーツ行動」も参照されたい。